

北海道地震津波の記録

「海が吠えた日」より

藁ぐろにつかまって

宮ノ本 故 大平ヤクエ

二十日の夜は、虫が知らしたのか生後二十五日の男の子が泣いて寝つかず、宵から抱いて立ったりすわったりして、寝ていなかった。朝方ウトウトしていたら大きな地震で目が覚めた。広島から復員していた夫はするめ釣に出ており留守で、母と子供三人で寝ていた。直ぐに戸を開けて外に出た。地震が揺っている間は前の小島千太郎さん宅の横の観音寺川の土手で皆が立っていた。まだ潮は来とらなかったので母は先上の子供二人を連れて、そのまま川の土手から宮崎宅の裏を通って無事に灘道へ逃げた。

私は男の子を抱いていたので一旦家に入った。真っ暗で子供を背負う「すけ」がわからんので箆笥を開け、何でもかんでも引き出して子供を背中に巻きつけ、お金が無くては困るので宵に松田の兄にやんと分けたするめの販売代金を驚掴みにして、袋に放り込んだ。そして逃げようとしたらもう外ではバリバリ、ゴウゴウという音がしてきた。「こりゃーしもたあ。おそうなっ

た」と慌てて土手づたいに宮崎宅の裏へと逃げたが、沖吉の兄の家の空地から波がざあざあど押し寄せて来て立往生してしもた。私は兄の家の横の竹垣につかまったが、二回目の波で道から川を越えて川向かいの松下さんの田圃の隅へ投げつけられた。三回ぐらい潮を飲んだが度胸がすわった。浜の方へと流されたら死んでしまうが田圃の方へ流されたら助かると思い、潮を飲まようにして灘の方に向かって流されていった。真崎のばあやんや孫さんたち後から逃げて来た人たちは、川へ流されて死んだ人が多かった。「助けてくれー」という断末魔の叫び声は今だに耳に残って忘れられない。

潮水を飲まんように頭をあげて流されとったらドラム缶が浮いて来たが掴まれない。壊れた家の柱が流れて来たがひっくり返って掴まれない。原さんの田圃（現在の中磯宅裏付近の下側）辺りまで流されたら、田圃の岸に積んであった「藁ぐろ」に行き当たった。足が田圃につかえてつると滑りながら手で潮をかきもって「藁ぐろ」に掴まった。「藁ぐろ」が岸へあがった時はよいが、潮が引き潮になったら藁が抜けてくる。あちちを持ちこつちを持ちして若宮神社の下位（現在の古牟岐道路四ツ辻付近）まで流されたら後が重たくなった。「誰ぜえ！おたいに掴まったんわー」「ばあやん助からんかいまあー」と男の子の声「ばあやんに掴まったら重みではあやんも死ぬのって、早よう藁を掴まえ」と言うど軽うなったんで「あの子は藁を掴まえたんかいなあ、死ぬのは一緒やったのにあんなこというんやなかった」と思いながらごひつ坂の下まで流されていったら潮が引いていった。